

英検1級のエッセイ・長文問題が扱う 題材・エッセイから学ぶもの

大川 光基

1. はじめに

日本英語検定が主催する実用英語検定試験は1963年に開始され、日本で認知されている最大級の検定試験のひとつである。受験者は学校関係者から社会人まで幅広く、その数はかなりの数に及ぶ。英検の資格は学校の単位に認定されたり、英検資格者は入学試験の優遇措置などがあり、社会的に認知度はきわめて高く、その影響力はきわめて高いといえる。また、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(2011)によると、中学校、英語教員の必要な英語力として英検準一級があげられている。2016年度からリニューアルされ、4技能のCEFRに対応する点数も導入され、その換算点が合格基準に用いられるようになり、書く技能の占める割合が増加した。今後も国際的に認められる英語の試験を目指して改善され、さらに社会的に広く利用されていくであろう。英検1級は合格率が1割から2割程度の難関である¹。その基準は広く社会生活に必要な英語を十分に理解し、自分の意思を表現できることである。特に読む技能については新聞、雑誌、一般文献にみられる高度な文章を読みこなす能力が求められる。長文の問題において、過去の結果によると合格者の正答率は平均して8割から9割程度であり、合格者は高度な文章を正確に理解しているように思われる。合格するには高度な文章を理解する能力が求められるが、どのような題材かは明確には規定されておらず、その学習方法を模索している受験者が多いように思われる。エッセイの問題は2004年に導入され、2016年度からはリニューアルされ、書くときのポイントが廃止された。本論において英検1級に実際に出題された過去20回分の長文題材を分析し、異文化理解の観点からその特徴を考察し、さらに2004年度から出題された39のエッセイのテーマの内容を分類する。

2. 異文化理解の重要性

中学校、高校の学習指導要領には指導目標に文化理解が明記され、教材選定の配慮として、3つの点があげられている。まず、教科書題材は英語圏の人々だけでなく世界の人々の多様なものの見方や考え方について学習できるものを含むべきである。次に、学習指導要領における「文化」は、様々な言語と人々の日常生活に密着した生活文化から自然科学まで幅広い分野にわたり、多様な文化題材が教科書に提示されることが求められる。また、同時に自文化理解を深めるための題材も必要である。オリンピックが近くなり、外国の人々の日本への関心が高まっている。国際社会に生きる日本人としての自覚を持つことが必須である。そのために自文化の理解とその文化が外国人にどのように考えられているかを学習することが必要になってくる。さらに日本文化を外国の人々に英語で発信する力が求められるであろう。

英検の問題は学習指導要領に沿って作成されており、生徒の英語力をはかるのに用いられる。文部科学省は英語教育の成果を確認するときによくその結果を用いる。ゆえに英検の最高の級である1級の問題を分析することにより、英語教員の英語力向上の役立つ情報や指導する上での何らかの教育的示唆を期待することができる。ゆえに本論では過去の長文とエッセイを分析対象とした。

3. 研究課題

以下の点が今回の研究の課題である。

- ・1級の長文問題が扱う題材にはどのようなテーマがあるか。
- ・1級の長文題材が扱っている国・地域の割合はどのようなになっているか。
- ・「意図・ねらい」の観点から長文問題をタイプ分けすると、どのタイプが、どのくらいあるか。
- ・エッセイにはどのようなテーマが扱われているか。

4. 分析対象と方法

今回の研究における分析対象は2009年度第1回から2015年度第2回までに出题された長文問題の合計100題である。調査対象は試験に出题された長文をひとつとして数えた。エッセイにおいては2004年度第1回から2016年度第3回までに出题された合計39のエッセイのテーマを対象とした。

分析の方法は以下の通りである。題材については英会話スクールCELのホームページ掲載されている試験情報を参考にしながら分析した。エッセイの分類については植田一三・編(2016)が分類したカテゴリーをもとに一部修正して、分類した。

・題材の内容のカテゴリー…歴史・文化、科学・技術、社会・経済、医学、社会・政治、心理学、環境、社会・教育

・文化題材の扱う国・地域²

- A 英語が母国語として使われている国(イナ
ー・サークル, e.g. アメリカ, イギリス, オ
ーストラリアなど)
- B 英語が公用語として使われている国(アウト
ー・サークル, e.g. シンガポール, インドな
ど)
- C 英語が外国語として使われている国(エク
スパンディング・サークル, e.g. 日本, 韓国,
中国, タイなど)

・文化題材の意図・ねらい³

- A 他文化理解
- B 自文化理解
- C 国際理解
- D 比較・対照
- E その他

・エッセイのテーマのカテゴリー…国際・政治、環
境、科学技術、経済・ビジネス、人間文化・レジ
ャー、犯罪・法律、家庭・高齢化、教育、メデイ
ア、複合型テーマ

5. 数量的分析の結果

分析結果は長文題材については各カテゴリーにあ
てはまる数を数えた。エッセイに対しては各カテゴ

リーに当てはまる数とその数が全体に占める割合を
計算した。結果は以下の通りである。

5.1. 長文題材の内容のカテゴリー

下の図は出题された長文題材の内容のカテゴリー
別の数を表している。歴史・文化に関する題材が多
く、その次に科学・技術に関するものが多い。また、
経済や医学に関するものもそれなりに存在する。

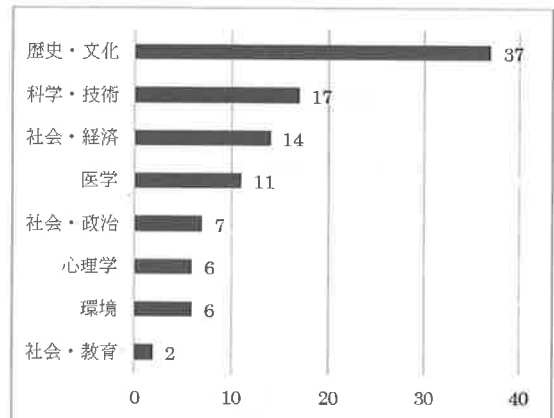


図1 長文題材のカテゴリー

5.2. 長文題材の扱う地域の数と割合

下の図は長文題材の扱う地域の問題数を表してい
る。Aはアメリカ、イギリスなどのように英語が
第1言語として話されている国で、Bはインドやシ
ンガポールなどの英語が第2言語として話されてい
る国で、Cは英語が外国語として話されている国を
示している。

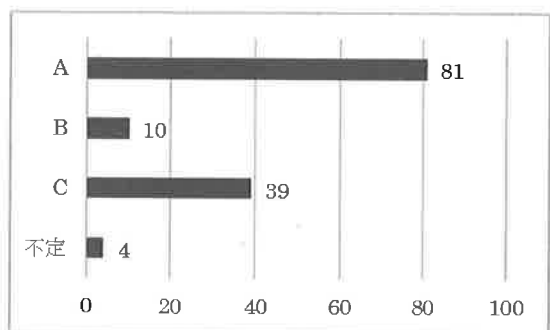


図2 長文題材の扱う地域の数

明らかにアメリカやイギリスなどのように英語を第
一言語として使われている国を扱った文章が多い。

一方、英語が公用語として扱われている国を扱う問題は少なかった。アフリカの国々、中国やヴェトナムのような英語が外国語として話されている国はそれなりに存在し、その国は多岐にわたっている。

5.3. 文化題材の意図・ねらいから見た分析

下の図は問題の文章を読む対象を日本人の学習者として設定した時の長文題材の意図・ねらいの数を表している。

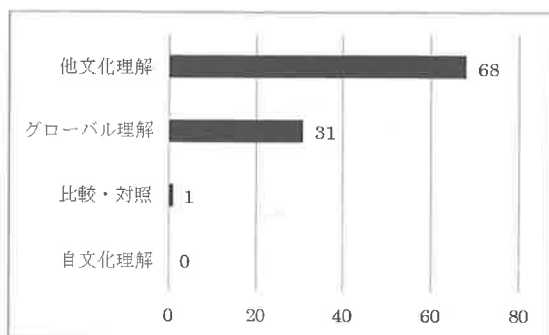


図3 文化題材の意図・ねらいの数

他文化理解が全体の約7割を占め、圧倒的に他文化理解を意図する題材が多いと言える。次に、グローバル理解を意図する題材は全体の約3割であった。一方、比較・対照は1つで自文化理解を意図する題材はなかった。ゆえに日本以外の国々の事象を扱った題材が多く、その内容は政治、経済、法律、医学などの分野にわたる。

5.4. エッセイのテーマについて

2004年度第1回からリニューアルされ、エッセイが試験に出題されるようになった。そのエッセイのテーマを植田(編)(2016)のカテゴリーを採用し、一部変更して以下のカテゴリー分けをした。表1にそのエッセイに出題された具体例を示している。

表1 エッセイに出題されたテーマの具体例

エッセイのテーマのカテゴリー	具体例
国際・政治関係	世界の飢餓の対策, 日本の国際問題の役割, テロの撲滅

環境	動物の権利, 世界の未開地の保護, エネルギー問題
経済・ビジネス	職業選択, 多国籍企業の役割, 自由貿易の是非
科学技術	原子力利用の拡大の是非, 遺伝子組み換え食品, クローニング
人間文化・レジャー	国民としての自己同一性の是非, ギャンブル廃止の是非
法律・犯罪	凶悪犯罪に対する社会の取組, 刑務所の犯罪者への効果
家庭・高齢化	高齢化社会の危機, 日本の低出生率への対処
教育	大学教育の万人への必要性, 現代社会の人々の倫理観
メディア	インターネットの規制, マスメディアの社会への影響
複合型テーマ	未来の世代のための安全保証, 将来の世代からの今の時代の評価

この表からもわかるように現代社会が直面している時事的な問題が数多く出題されている。時事的な問題に対する背景知識と社会事象に対する深い理解が必要であろう。

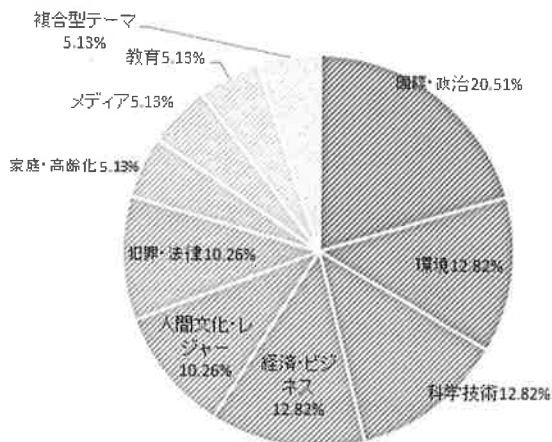


図4 エッセイのテーマに出題された各カテゴリーの割合

これらのグラフからわかるように、国際・政治、環境、科学、経済・ビジネスに関するテーマが数多く取り上げられている。しかし、1つのテーマに偏っているわけではなく、様々な分野がとりあげられているので、学習者は幅広い分野の背景知識が必要で日ごろから様々な社会事象に関心を持つ必要があるであろう。

6. まとめと考察

以上の分析結果から、英検1級の出題された長文題材とエッセイの特徴とそれによって導きだされる示唆をまとめてみたい。

・教科書題材に関する先行研究の結果と同様に、1級の長文題材で扱われる地域は圧倒的に英語が第1言語として使われている国が多く、英語が第2言語として使われている国は少なかった。この傾向はYamanaka (2006)と大川(2013)の調査結果にみられるように、中学校や高校の英語教科書題材にもあてはまる。英語で書かれた長文問題は日本の学校で英語を学ぶ生徒を対象としているため、英語が主要言語でアメリカやイギリスなどの国々を扱うことが多くなるのは当然であるが、現在、英語は国際語として広く使われている。英語が第1言語として使用される国々だけに偏るのではなく、シンガポールなどの英語が公用語として扱われている国々や中国や韓国などのように英語が外国語として使用されている国を扱う内容を学習する必要もある。なぜなら現在のグローバル化された社会において、英語が母国語でない国で使われることがはるかに多いからである。ただし、エッセイにおいては貧困や世界平和に関する問題では発展途上国など英語圏以外の国の知識がないと書くのが難しいエッセイのテーマがあることは事実である。ゆえに英語が直接話されていない国であっても、その国の政治や風俗習慣を学ぶ必要がある。

・文化題材の意図としては圧倒的に他文化理解が多く、その次にグローバル理解であった。これは、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める」という中学や高等学校に規定されている学習指導要領の指導目標や題材の注意点と合致する。日本以外の外国の文化を知ることは学習者にとっては興

味深いことであるが、単なる表面的な知識では英検1級に出題されている題材を理解することはできないであろう。学習者は関連する題材を効果的に取り入れ、文化理解を深めることが大切であろう。ただし、日本文化を深く理解するための問題が出題されていなかったが、これからは日本文化を発信する人材が必要になってくるので、この分野の学習も重要であるように思われる。

・エッセイのテーマに関しては国際・政治に関するものが多いが、環境、科学技術、経済・ビジネスなど実に多分野にわたっている。日頃から一つの分野に偏ることなく、今回あげたテーマに絞りながら、日頃から社会における時事問題に関心をよせ、その知識を利用して、自分の考えを発信する必要があるだろう。この練習は二次試験の面接に役立つと思われる。また、学習する際には4技能のバランスに留意しながら、学習していくことも、今後ますます大切になってくる。また、書く能力をエッセイだけでなく、TOEFLに出題されているような聞いた内容を再現して書くような試験も今後必要になってくるであろう。聞いた内容を書くという作業は、会議や交渉などの場面で必要になってくるからである。グローバルな試験として英検の問題がますます改善されることを期待したい。

註

1. 2016年第1回から合格基準が素点からCEFRの換算点に変わり、合格率は少し上がったように思われる。
2. Kachru (1996)は英語が使われている地域を3つに分け、6.2のAをInner Circle、BをOuter Circle、CをExpanding Circleと呼んでいる。本論でも彼の定義を採用して、調査した。1つのレッスンが複数の地域を扱うことがあった。その場合、両方の地域が題材として重要であると判断した場合は両方の地域に数えた。
3. 1つのレッスンが他文化理解と比較・対象のように2つのカテゴリーにあてはまる場合、その特徴が強いカテゴリーに数えた。

参考文献

植田一三(編)(2016)。「英検1級面接大特訓」。

- 東京：Jリサーチ出版。
- 大川光基(2013). 「新学習指導要領における中学校英語検定教科書が扱う文化題材と日本文化理解に関する題材の考察～異文化理解の観点から～」. [MEDIA, ENGLISH, AND COMMUNICATION]. 第3号, 79-94.
- 文部科学省(2008). 「中学校学習指導要領(平成 20年9月)解説—外国語編—」.
- 文部科学省(2010). 「高等学校学習指導要領解説—外国語編—」.
- 文部科学省(2011). 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」. 〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf〉 (2017年3月30日)
- CEL(2017). 「英検1級試験情報」. 〈<http://www.cel-eigo.com/exam/index.html>〉 (2017年3月29日)
- Kachru, B.B. (1996). Norms, models, and identities. *The Language Teacher*, 20(10), 15-21.
- Yamanaka, N. (2006). An Evaluation of English Textbooks in Japan from the Viewpoint of Nations in the Inner, Outer, and Expanding Circles. *JALT Journal*, Vol 28(1), 57-76.

(愛媛県立三崎高等学校 教諭)